

**齋藤秀雄先生没後40周年
ご逝去半年前の1974年例会No2へのご参加に感謝**

The 40th anniversary of Prof.Hideo.Saito's death.
The many thanks to joinng our No2 concert in 1974
just half year before his death

日本ブラームス協会(以下 JBS)の前身”ブラームスの会”が発足した翌 1974 年の例会は当時の染川会長と故本田顧問により企画されました。

講演 ブラームスの音楽を支えるもの
講師 作曲家 小倉朗
演奏 ブラームス/ピアノ三重奏曲1番 ロ長調 Op.8
Vn 永田邦子 Vc 藤原真理 Pf 鹿野のり子
日時 1974年3月24日(日) 13pm
会場 横浜港の見える丘公園イギリス館

その日開演を待つイギリス館サロンの雰囲気は最高潮に達していました(写真1)。前半の講演は「北風と太陽」を脱稿された直後の”オグラームス”こと作曲家の小倉朗氏(写真2)で「…ブラームスの器楽、特にシンフォニーや室内楽を中心としてブラームスの『新古典主義』を考えてみよう…」と始まる(会誌3号より)。質疑応答ではハイレベルな質問が続き緊張感のある講演と記憶しています。後半の演奏は桐朋の若手3人によるブラームスのPトリオ1番で、チェロの藤原真理さんは3年前に毎コン1位、翌年東京文化会館(小)でデビューという時でした。驚いたことに当時すでに体調を崩されていたはずの故齋藤秀雄先生が愛弟子達の指導に駆けつけて客席に小倉氏と並んで座っていらっしやいましたので、慌ててシャッターを押しました(写真4)。イギリス館はもちろん音楽専用ホールではなく、当日の楽屋は給湯室のような小部屋で、齋藤先生が3人に指示を出されている様子は緊張感が漂って、とても直接撮影できる雰囲気ではなかったので速く受付あたりから撮った1枚が残っています(写真5)。演奏は楽章を追うごとに熱く、終楽章の会場は大いに盛り上がり、演奏が終わると拍手が鳴り止みませんでした。こうして40年経っても色あせない記憶は「イギリス館のサロン」「チェロの藤原真理氏と齋藤秀雄先生」「ピアノトリオ1番」の3要素によるものですが、選曲が成功要因だったと今でも感じています。Vn ソナタでも Vc ソナタでもなく Pトリオ第1番。21歳

羽木 光彦



で作曲し 56 歳で手直した改訂版が現在演奏されているのは良く知られているところです。言わばこの曲にはブラームスの一生が凝縮されて「洗練としてドラマティックな名曲」と感じています。閉会後は丘を徒歩で下り(写真6)中華街で打上に参加しました。小倉先生、奏者3人そして齋藤先生も残って下さいました(写真7,8)。永田、藤原両氏とお元気に談笑されていた齋藤先生(写真8)が6ヶ月後の1974年9月18日にご逝去されるとは想像出来ませんでした。JBSでは打上写真は非公開が原則ですが、貴重な記録と考え没後40周年に際し会誌で公開して、齋藤秀雄先生の例会No2へのご来聴に感謝の意を表したいと思います。

齋藤秀雄門下生たちと JBS の関係

1979年「ブラームスの会」は「日本ブラームス協会」(JBS)に改称する記念例会No38を催行し、前年のチャイコフスキーコンクール2位に入賞されてご多忙なVc 藤原真理、P 岡本美智子のDUOがご出演下さいました。その後藤原真理氏は会友として節目のNo50、No100例会、1983年生誕150年祭でも演奏頂き、倉田澄子氏とともに初期JBS例会の基盤を造って下さいました(写真9)。1995年からは若手演奏家支援シリーズとして林峰男氏に音楽監督にご就任頂き、若手と直接共演する例会を20年続ける中、Vcの室内楽曲のほぼ全曲を奏破して頂き、今No142例会で最終回を迎えることになりました(写真10)。2006年には著名音楽家による「ブラームスを語る」シリーズに堤剛氏(当時桐朋学園大学学長)がご出演下さいました(写真11)。1980年代の室内楽例会にご出演頂いたVc 秋津智、菊田雅治、西内荘一、松波恵子の各氏にも感謝したいと思います。このようにJBS例会は多くの齋藤先生門下のチェリストたちによって支えられて来ました。1992年からスタートしたサイトウキネンフェスティバル松本(写真11 SKF/HPより転載)は来年2015年より「セイジオザワ松本フェスティバル」に改称して更なる充実と飛躍を目指すとのことです。

JBSも「故齋藤秀雄先生に見守られ、大いに期待されている」と感じて今後とも若手演奏家支援をモットーに運営努力を継続することをお約束して、最後にもう一度40年前のご来聴に心より感謝申し上げます。

(会長)

